様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月３日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０６１０
研究課題名（和文）　近代トルコにおける西洋演劇の受容と伝統演劇

研究課題名（英文）　Western and Traditional Drama in Modern Turkey

研究代表者
永田　雄三（NAGATA YUZO）
財団法人東洋文庫・研究部・研究員
研究者番号：２００１４５０８

研究成果の概要（和文）：本研究は、トルコの「近代化」過程において生じた伝統と西洋近代との異文化接触による文化変容の実態を、演劇活動を事例として明らかにすることを目的としている。トルコの伝統演劇は、東は古代中国に起源を持つ東南アジア・インドの影絵芝居、西は古代ギリシア―ローマ以来のヨーロッパ諸地域における「ミモス劇」などの影響を受けて成立した。このトルコの伝統演劇の基本的な性格は喜劇性・即興性・音楽性という三つの要素に求めることができる。西洋演劇の受容については、シェイクスピア劇に代表される「正劇」部門とヴォードヴィルなどの「ヴァラエティ」部門とに分けることができる。このうち、後者すなわち「ヴァラエティ」演劇は、上に述べたトルコの演劇と共通な性格を持っている。このことが、トルコの西洋演劇受容において「正劇」部門よりも、むしろ「ヴァラエティ」部門が成功した理由である。

研究成果の概要（英文）：The aim of the present research project is to clarify the actual conditions of cultural change brought about by contact between traditional and Westernized elements within the process of Turkey's modernization, by taking up developments occurring in the dramatic arts. Traditional Turkish drama developed under influences from both Eastern and Western civilizations, in the forms of ancient Chinese shadow plays introduced through Southeast Asia and India, and Greek and Roman pantomime (*mimos*) entering via various regions of Europe. The characteristic features of traditional Turkish drama are comedy, spontaneity and melody. In the process of adopting modern forms of Western drama, influences of the "orthodox" stage represented by Shakespearean drama and "variety" entertainment represented by vaudeville can be identified. Of the two, it is the latter that has the most in common with traditional forms, a fact that explains why variety entertainment has enjoyed more popularity and success among Turkish audiences than "orthodox" stage drama.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野： 人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：「近代化」　異文化接触　演劇　イスタンブル　正劇　ヴァラエティ

１．研究開始当初の背景
トルコの近代化に関する研究は多いが、演劇を事例として行われた研究は皆無である。また、わが国の演劇史研究において、イスラーム世界、とりわけトルコの演劇に関する専門的研究は、わずかな例外を除いては、これまでまったく行われていない。この状況に対して、一定の貢献をすることが本研究の背景と動機の一つである。

２．研究の目的
(1) 19 世紀以後におけるトルコの近代化によって起こった西洋文化とのあいだの異文化接触の実態を、演劇のケースを事例として解明する。

(2) ただし、本研究は、これを演劇額の立場から行うのではなく、歴史学の立場すなわち「都市社会史」の視点から行う。

(3) アジアの西端に位置するトルコとヨーロッパ諸国との文化接触・交流の一端を明らかにすることによって、現在進行中の EU 加盟問題に見るような、イスラーム諸国の中におけるトルコの特殊性を、文化的側面から明らかにすることも本研究の問題意識の一端をなしている。

(4) 西洋演劇受容期のトルコの演劇空間を、同時期の日本およびヨーロッパの演劇空間と比較することによって、一般に「世紀末」と呼ばれる 19 世紀末から 20 世紀初頭の世界史的状況を共時的・通地域的に考察することも視野に入れている。

３．研究の方法
(1) 本研究のための基本的資料は、研究代表者によって収集された、19 世紀末から 20 世紀初頭のイスタンブルにおいて上演された演劇のポスターおよびパンフレット 170 点である。この数は、同時期に上演された約 2,000 件の演劇上演の 10%に満たない。しかし、散逸しやすいこの種の資料をこれだけまとめて収集した例は国際的にみても稀である。

(2) イスタンブルの「オスマン文書局」所蔵の勅令、法令などの文書の分析によって、政府および宮廷の演劇活動に対する政策を明らかにする。

(3) トルコ語によって出版された当時の新聞・雑誌に見られる演劇活動を「都市社会史」の視点から分析する。

(4) トルコの伝統演劇のうち、本研究と関連の深い影絵芝居（カラギョズ）、大道演芸（オルタオユヌ）、語り物（メッダーフ）などに関してこれまでに行われた研究（トルコ語による）を整理することによって、その近代における変容過程を正しく理解することに努める。

(5) 西洋演劇の受容については、シェイクスピア劇に代表される「正劇」部門と、「ヴァラエティ」部門とに分けて考察する。また、西洋演劇との出会いによって発生した新しい演劇形態である「トゥルーアート演劇」について考察する。

(6) 「正劇」、「ヴァラエティ」、「トゥルーアート」演劇の上演に関する前述のポスターおよびパンフレット資料を分析することによって、これらの演劇の実態を解明する。

(7) 上述の資料に見られる演劇の上演以外の情報を「都市社会史」の観点から分析する。

４．研究成果
(1) トルコの伝統演劇（カラギョズ、オルタオユヌ、メッダーフ）は、東は古代中国に起源をもつさまざまな影絵芝居、西は古代ギリシアーローマ、中世ヨーロッパ、そして、とりわけ 16 世紀のヴェネツィアに興隆した大衆演芸「コメディア・デラルテ」と深い関係にあった。このことは、モンゴル高原から中央アジア、そして西アジアへと移住したトルコ民族史の一環である現在のトルコ共和国の文化的特質を象徴している。

(2) これらトルコ伝統演劇の主たるテーマは、いずれもオスマン帝国の首都イスタンブルの住民や日常生活の模様をパロディ化したものである。それは、たとえば、日本の江戸落語と共通した性格を持つことが確かめられた。また、ヨーロッパとの対比でいえば、

「コメディア・デラルテ」およびその影響を強く受けた 17 世紀フランスの喜劇作家モリエール、18 世紀イタリアの喜劇作家ゴルドーニ作風などとも相通じる。このことが、のちに西洋演劇の受容にあたって、これらの作家の作品が多く採用されて翻訳・翻案の形で上演された理由である。

(3) 19 世紀以後における西洋演劇に関するこれまでの研究は、「正劇」の受容の身がもっぱら考察の対象とされてきた。しかし、当時のポスター資料などを検討すると、それだけではなく、むしろ当時のヨーロッパ諸国で行われていた「ヴァラエティ」演劇もまた、西洋演劇受容の大きな柱であるとともに、これらの演劇がむしろ大衆的な人気を呼んでいたことがわかる。「正劇」の分野ではアルメニア人役者の活躍が顕著であったため、アルメニア語なまりのトルコ語がトルコ人観客に違和感を与えるといった「言語」面での問題、あるいは西洋演劇におけるヨーロッパ・キリスト教社会の習慣とイスラーム社会の習慣との間の齟齬などの問題群が存在した。これに対して「ヴァラエティ」部門ではトルコ人役者が重要な役割を果たした。その具体的な事例が前述の「トゥルーアート」演劇の出現と興隆であった。この「トゥルーアート演劇と西洋の「ヴァラエティ」演劇に共通するのは、即興性・喜劇性・音楽性であった。そして、これこそトルコの伝統演劇の持つ三要素であった。これらのことが、トルコが西洋演劇を受容するにあたって、「正劇」よりも、むしろ「ヴァラエティ」の受容が成功した理由である。

(4) トルコの伝統演劇が宮廷によって支えられていた一面があることと同じく、西洋演劇の受容にあたっても、これに反発するイスラーム主義者による妨害に対して、宮廷による財政的援助と政治的支援・保護とが大きな意味をもった。このことは、ヨーロッパ諸国でもそうであったように、演劇活動を監視下に置くことによって、良心的で道徳的な「国民」演劇を発展させようとする宮廷や政府による干渉あるいは検閲が演劇の質と性格をゆがめた一面を持っていたことが確かめられた。

(5) 都市社会史的観点からみて、西洋演劇の受容は、ひとり演劇のみならず、イスタンブル社会の日常生活においても、たとえばパリの最新モードの移入、イスラーム的生活習慣から西洋的それへの移行などの文化的・社会的変容をもたらした。

(6) イスタンブルの新市街と旧市街との間の演劇空間としての相違は、前者が芸術性の高い「正劇」の上演を柱とする劇団が活躍する場であったのに対して、後者は「ヴァラエティ」演劇を得意とする劇団が活躍する場であったという相違である。これは、あたかも明治から昭和初期の東京における日比谷界隈と浅草界隈との相違を想起させる点で興味深い。この事実は、演劇の上演と内容に対して観客層の社会層と関心の所在が大きな意味を持つことを確認させる。

(7) 西洋演劇受容の結果、アジアの西端に位置するトルコ、とりわけイスタンブルは、パリ、ロンドン、ウィーンなどと同質の演劇都市の性格を獲得した。

(8) 本研究の成果の一部は、すでにトルコ語による論文の形で公表されており、入手困難な当時のポスター資料の分析を柱とした研究の可能性を開いた斬新な研究として、トルコ本国になお多数残存していると思われる同種の資料による研究手法を開拓した研究として評価されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① 江川ひかり、Tanzimat Döneminde Şehir ve Kasabanın Yeniden İmarı, *Türklük Araştırmaları Dergisi*, 査読無, No. 20, İstanbul, 2009, pp. 421-443
② 永田雄三、Son Dönem Osmanlı İstanbul'unda Tiyatro, *Türklük Araştırmaları Dergisi*, 査読有, No. 19, İstanbul, 2008, pp. 327-346
③ 江川ひかり、From Bazaar to Town: The Emergence of Düzce, イスラーム世界研究, 査読有, 3 巻 1 号, 2009, pp. 293-309
④ 江川ひかり、Küreselleşme ve Yörükler: Batı Asya'da Yağcı Bedir Yörükleri Örneği, *Küreselleşme ve Uygarlığı*, Bişkek, 査読有, 2009, pp. 63-67
⑤ 江川ひかり、19 世紀中葉オスマン帝国における人口と世帯－西北アナトリア、バルケスィルの事例から－、歴史人口学と比較家族史、査読有、2009、pp. 205-234
⑥ 江川ひかり、19 世紀オスマン帝国北部中央ブルガリアの農村社会、明大アジア史論集、査読無、13 号、2009、pp. 1-29
⑦ 高松洋一、18 世紀オスマン朝官僚機構における文書処理の一実例、明大アジア史論集、査読無、13 号、2009、pp. 51-76

〔学会発表〕（計 5 件）

① 吉田達矢、19 世紀半ばのオスマン帝国に

おける東方正教徒「共同体」再編構想、東洋文庫現代イスラーム研究班、東北大学、2010年3月4日

② 江川ひかり、Osmanlı Döneminde Yörüklerin İltizam Sistemine Girmesi: Yağcı Bedir Yörükleri Örneği、前オスマン・オスマン史国際会議（CIEPO）、キルギス共和国ビシュケク、2009年8月25日

③ 永田雄三、世紀末イスタンブルの演劇空間、日本トルコ交流協会、東京大学本郷キャンパス、2009年6月6日

④ 永田雄三、トルコのことわざーその文化史的背景、ことわざ学会、明治大学駿河台キャンパス、2009年5月30日

〔図書〕（計3件）

① 永田雄三・江川ひかり、白帝社、『世紀末イスタンブルの演劇空間ー都市社会史の視点からー』2010（予定）

② 永田雄三、刀水書房、『前近代トルコの地方名士ーカラオスマンオウル家の研究』2009、329頁

③ 江川ひかり・İlhan Şahin, *Bir Yörük Grubu ve Hayat Tarzı: Yağcı Bedir Yörükleri*, İstanbul, 2007, 285頁

６．研究組織

(1)研究代表者

永田　雄三（NAGATA YUZO）
財団法人・東洋文庫・研究部・研究員
研究者番号：２００１４５０８

(2)研究分担者

(3)連携研究者

江川 ひかり（EGAWA HIKARI）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：７０３１９４９０
高松 洋一（TAKAMATU YOUITI）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：９０３７６８２２
吉田達矢（YOSHIDA TATSUYA）
東洋大学・アジア文化研究所・客員研究員
研究者番号：１０４０９４４３